

# 風景の講義

総合政策学部

細野助博 教授

Hosono Sukehiro

特殊講義

「朝日新聞社提携講座・政策とメディア」

[水曜日5限/2年生以上、他学部履修可]

## TVにも出演の編集委員

「みなさんは55年体制って知っているかな？」

1955年の保守合同による自民党結党から自民党一党支配が半世紀続いた体制のことである。そう問いかけて、政治メディアの変遷について語る。

「自民党一党支配であった時代、政治取材といえば自民党取材や派閥取材でした。しかし1993年に冷

戦構造や成長経済も終わるなかで小選挙区制の導入もあり、政局取材から、各政党がだす政策の取材へと変わってきました」

教壇のマイクの前には、星浩氏。

日曜朝の政治討論番組「サンデーロジエクト」（テレビ朝日系）のコメンテーターとしてお見かけする顔である。「星さんは日本政治について長く取材を行い、政治とメディアとの相互関係研究も進めている朝日新聞の編集委員です。編集委員は実力あるエリート。みんなしつかりと

## 新聞をどう読むか、読む意味とは

### 朝日新聞論説委員らが連続講義

話を聞いてほしい」と細野助博教授が紹介して講義ははじまった。

9・11総選挙分析を中心に、テーマは「政治と世論とメディア／政治ジャーナリズムの虚像と実像」。9月28日——講座第2回目である。

### 他大学にもネットで放送

「学術・文化・産業ネットワーク多摩」と朝日新聞社による提携講座

「政策とメディア」は、後期からの、全13回のシリーズ。朝日新聞東京本社の第一線で活躍する編集委員や論説委員らが各回の講師をつとめる。

小泉内閣とポスト小泉、米ブッシュ政権の世界戦略、ノーベル賞と科学報道……政治、経済、外交、文化・科学と専門分野も多岐にわたって、週ごとに講師が変わり、トピックも異なっている。

コーディネーター役をつとめる佐田智子・同社総合研究本部主任研究員は講座全体のねらいを、「新聞で

“意見力”を鍛えてほしい。新聞というメディアの特徴および問題点、現状とその役割について考え、新聞という活字の特性を生かし、自分の意見をつくり社会に問うてみてほしい」と第1回で述べた。

講義の様子は、「遠隔授業方式」でインターネットを経由しネットワーク多摩に加盟している大学のうち6大学でも放送されている。

## 小泉さんでメディア配列変わった

——8号館の大教室はこの日も学生であふれる盛況だった。TVカメラが設置され、ふだんの大学の授業とはやはり雰囲気が違う。新聞の内側の肉声に接してみたい、という関心と期待の高さだろうか。

星氏の講義が進む。選挙報道について。そして自民党が勝利した「9・11総選挙」、自民党圧勝の理由、小泉政権とメディアの関係について。

「選挙報道には、3種類の報道があります。1つ目に、選挙がどうなるのかという『予測報道』。2つ目に各政党、候補者の『政策報道』。そして、その選挙の意味を考える『分析報道』です」

情報があふれかえる多メディア時代にあって、新聞という活字メディアの特性を生かし、出来事や現象の分析をしっかりと行い読者に見せること。このことが政治メディアには特に重要である、という。

9・11総選挙で自民党が勝利した理由として、①無党派層を取り込んだこと ②公明党が下支えをしたこ



星浩朝日新聞編集委員

と ③小選挙区の効果——を挙げた。「これらの要素が重なり合い、自民党は歴史的な大勝利を収めた」と。「小泉政権は従来の政治メディアと間合いが異なる」と、小泉政権の特徴の一つであるメディアとの関係について、星氏は述べる。

政治を取り巻くメディアには第一列、第二列、第三列という間合いがある。それぞれ、第一列は新聞や通信社、テレビ報道局。第二列は硬派雑誌、硬派テレビなど。そして第三列はワイドショーや軟派雑誌などを指す。「いままで政治は第一列でのみ大きく取り上げられてきました。しかし、小泉政権の場合、田中真紀子元外相の話題や拉致問題、刺客騒動などを、ワイドショーなど第三列が大きく取り上げ、第三列に煽られて第一列が報道をするという、これまで

にない政治とメディアの関係が展開されました」

このことが、国民の注目を大いに集めることになった。半面で、「日米関係、国交正常化、年金問題などこみ入った問題が軽視されてしまふ」という問題も生まれた、と指摘する。目を引く話題中心のワイドショー的なものに流されて、打ち立てるべき政策に関しては関心が薄れてしまっている、という問題状況だ。そのまま、テレビを利した小泉政権の強みと弱み、その功罪と重なるかもしれない。

こうして政治メディアに求められるものも変わってきた、と続ける。「The said」から「I think」へ。誰がどう言ったということ報道するのみではなく、そのことを踏まえ、それをどう捉えるのかということが求められるのだ。そして「多メディア化してきた現在、新聞、テレビ、さらにインターネットとの関係というものもメディアの課題となる」と星氏は語った。

### 虚偽メモ問題も

第一回目の講義で佐田主任研究

員は「新聞をどう読むのか、なぜ必要か、読む意味は何か」と問い、「新聞は活字メディアだから、取っておくこともできる。事実を確認して、さらに考えること、判断すること、意見を立てることにとでも役立ちます。そういう利点を上手に使いこなすことが、多メディア時代を生きる今の若い人たちの課題だと思う」と話した。

また、選挙戦さなかにおきた、朝日新聞の虚偽メモを基にした記事（8月22日付「追跡 政界流動」）についてもみずから取りあげ、「検証 虚偽メモ問題」（9月15日付）の特集紙面を手に、「確かに問題があった。社内にもいろいろな議論があったが、3ページで内部の問題を検証した」と社の対応と姿勢を説明した。

会場からの質疑応答も盛んである。第5回は藤森研・論説委員による「報道と人権——100年目のハンセン問題検証」。講義のあとのやりとりが興味深かった。

学生「ハンセン病について、知識はあっても感情のところ、怖い、と感じたことはありませんか」

論説委員「たしかに知識はあっても、怖いと思ってしまうことはあります。伝染はしない、と知ってはいても、最初に一緒に風呂に入るときには、一瞬とまどったりしました。でも、患者の方々と交流を深め、話を聞くなかで、私の中の恐怖はなくなっていきました」

### 記事と記者の肉声

記事の信頼性、とよくいわれる。だが、新聞を読んだだけではわからないことも多いのだ。新聞のエクリチュール（文体）の向こうにある、それを書いた記者の肉声。それに接することで、視界がひらけることがある。この人が書く記事なら読んでみよう、というように。やりとりを聞きながら、そんなことを考えていた。新聞を一つの情報源としてしか考

えていなかった私にとって、この講座は「新聞の意味」を考え直す機会になった。話の中心はむろんだが、代わりばんこに登壇する新聞人の多様な個性、その話しぶりも楽しみにしながら、私は受講している。

（総合政策学部国際政策文化学科3年 益本ゆか）